

【校長のつぶやき】その1 「あいさつの“距離感”」 (平成30年6月15日)

毎朝、できるだけ学校の前の横断歩道に立つようにしている。子どもたちに「あいさつをしている？」と聞けば、おそらくほぼ全員が「あいさつをしている」と答えると思う。

確かに、本人は“あいさつ”をしているのだろう。でも、大切なことは、“あいさつの気持ち”が伝わっているかどうかである。上手に“あいさつの気持ち”を伝えるためには、“距離感”が大切である。

私が“気持ちのよいあいさつ”をしていると感じる子どもたちは、「5m以上離れたところ」からあいさつをしている。遠くからあいさつをする子は、私よりも「先に」あいさつをしている。そして、私に「届く大きさの声」であいさつをしている。

「0m」で小声であいさつをする子が、まだちょっといる。通り過ぎながら「-1m」であいさつをする子も、まだちょっといる。

たかが距離、されど距離。自戒して、私も「10m」の“距離感”であいさつをしよう…と思う。

【校長のつぶやき】その2 「生活の“リズム”」 (平成30年6月29日)

本校の登校時刻は、午前8時15分。ただ私の本音は、第5号にも書いたとおり、「午前8時までには全員が登校していること」である。

この“15分早く”というのが難しい。それは、「その子固有の生活リズム」(朝起きてから家を出るまでの時間感覚)があるからである。

私の仮説は、「学校での“生きがい”があれば、子どもは学校へ早く行きたいと思うのではないか」というものである。実際、特設陸上部の朝練に参加している子どもたちは、7時30分を目安に登校できている。その生活リズムが身に付くと、朝練がない日もほぼ同様の時刻に登校できている。

“生きがい”は、それぞれにある。友だちに会っておしゃべりをしたい、係や委員会の仕事をしたい、生き物の世話をしたい、担任に会っていっぱい話をしたい・・・。

子どもたちがそれぞれの“生きがい”を見つけたとき、もっともっと「笑顔いっぱい」の学校になるのだろうと考えている。

【校長のつぶやき】その3 「保護者も“笑顔”になるために」 (平成30年7月9日)

「親」という役割を果たすのは、本当に大変。「素の自分」でいたいのに、「親」という役割がのしかかってくる。ましてや、言うことを聞かないのが「子ども」である。ストレスがピークになって「力」で思い通りにしようとする、と“体罰”や“虐待”へとつながっていく。

「親」として困っているときは、よかったら校長室を訪ねてほしい。心理的な部分では、スクールカウンセラーを紹介することもできる。生活的な部分では、スクールソーシャルワーカーを紹介することもできる。私でよいのなら、話を聞くだけならできる。話すだけでも心が軽くなることもある。

最初から完成された「親」などいない。みんな悩みながら「親」という役割を何とか担っている。

親の「笑顔」は子どもの「笑顔」につながっている。私の望みは「子どもも笑顔、保護者も笑顔、教師も笑顔」である。くどいけれども、「親」として困っているときは、気軽に校長室を訪ねてほしい。

【校長のつぶやき】その4 「“だいじょうぶだよ”と言える自分に」

(平成30年7月17日)

みなさんは、わが子に「だいじょうぶだよ」と言えるだろうか。

子育てをしていると、いろいろな“ささやき”が周りから聞こえてくる。「こんな点数ではだめだよ」「ちょっと変わった子だね」「先が思いやられるね」「親の育て方が悪いんじゃないの」・・・。

こんな有形無形のプレッシャーを受けると、親として“不安な気持ち”が大きくなっていく。

すると、「もっと勉強をしなさい」「どうして言うことを聞かないの」「こんなことしていると、将来困るよ」などと、その不安を子どもにぶつけ、不安は“親から子ども”へと移り、“子どもの表情”はくもっていく。かく言う私も、不安をあおる親のひとりである。

この“不安の連鎖”を断ち切る方法はあるのだろうか。それが、「だいじょうぶだよ」という魔法の言葉ではないかと考えている。そのかわり不安を受けとめなければいけない親は大変ではある。その覚悟ができたとき、子育ては一挙にレベルがあがり、子どもは“笑顔”になると思うのだが、いかがだろうか。

## 【校長のつぶやき】その5 「“ルール”と“リレーション”の確立」

(平成30年7月20日)

今年も、3年生と5年生は、「Q-Uテスト」を実施した。このテストは、「① 学校生活における子ども個々の意欲や満足感」や「② 学級集団の状態」を質問紙により測定することができる。

では、②で分かる「よい学級集団」とは、どのような学級集団なのだろう。それは、「“ルール”と“リレーション”が同時に確立している学級」である。

「ルール」	子どもたちの中に内在化されたマナー（行動規範）
「リレーション」	ふれあいのある、本音の感情交流（関係性）

(注1)

私は、「ルール」を「父性（きびしさ）」、「リレーション」を「母性（やさしさ）」と読み替えることができると考えている。つまり、「きびしさも、やさしさも両方ある学級」が「よい学級集団」であると言える。(注2)

注1) 「ルール」と「リレーション」は、「Q-Uテスト」を考案した早稲田大学 河村茂雄教授の理論による。

注2) 「父性」と「母性」は、「性質」「役割」の話である。

しかし、最近思うのだが、これは、「学級」に限ったことだろうか。「本校の学校全体」にも当てはまるだろうし、「本校の教師集団」にも当てはまるだろう。また、「PTA組織」にも当てはまるかもしれないし、「会社組織」にもあてはまるかもしれない。そして、「家庭」である。

みなさんの「家庭」は、「父性と母性の両方が確立」されているだろうか。

私が育った昭和の時代だったら、頑固親父が「父性」を発揮し、内助の功の母親が「母性」を発揮するというある意味、父性と母性のイメージが両立しやすかった時代とも言える。そして、平成も終わろうとしている今…

要は、誰が「父性」を発揮し、誰が「母性」を発揮するかである。

例えば、ある家庭で母親が「父性」を発揮しやすいならば、父親が「母性」の役割を担うことが考えられる。また、一人で子育てをしているのならば、あるときは「父性」を出し、あるときは「母性」を出し、というように、2つの役割を担えばよい。また、祖父母と一緒に住んでいるならば、祖父母、父母の中で、「父性」の役割を担う人、「母性」の役割を担う人を分担すればよい。

1学期、校長は、「くつ箱のかかとをそろえる」とか「廊下を静かに歩く」とか、「ルールの徹底」にこだわってきた。これは、本校では「ルール」の割合を高めた方が「リレーション」とのバランスが取れるのではないかと考えたからである。

夏休みが終わって子どもたちが戻ってきたら、この「ルール（父性）」と「リレーション（母性）」の両方の確立を再度目指していきたい。夏季休業は、そのための作戦を練る機会としたいと思う。

(ちなみに、夏季休業中も教職員は勤務日で、休んでいるときは土曜勤務の週休振替、夏季休暇、年休等の取得なので、念のため)

## 【校長のつぶやき】その6 「安全な登下校のために」

(平成30年8月27日)

恥ずかしながら、どこまでが学区なのかを実地に確認していなかった。そこで、子どもの家を地図で確かめ、通学路を視認してみた。やってみると、結構遠いところから通っているのに驚いたり、学校に着く時刻と表情を思い返して納得したり……。 (出かけるまでは徒歩か自転車だと思っていたが、結局自動車での実施に。情けない。)

一つ思ったのは、「人の目の多い主要通学路に早く出ること（できるだけ長くいること）が“安全・安心”につながるのではないかと」ということ。2学期の始まりにあたって、各家庭でも再確認をお願いしたい。

【校長のつぶやき】その7 「清明魂（せいめい だましい）」 （平成30年9月7日）

第2学期始業式に「清明魂はどんなものか、みんなの姿で示してほしい」と話をしました。校内水泳記録会での姿や全校集会に臨む姿、清掃に取り組む姿などに、子どもたちが“清明魂”を体現している様子を感じました。

他の学校とは違う、オリジナルな「清明魂」とはどのようなものなのか。私も一緒に考えているところですが、ヒントの一つは校歌にもある「みんなと ともに」なのかなと思っています。

「自分だけ」ではなく「みんなと ともに」。「自分の力」を生かして「みんなと ともに」。何かウキウキしてきませんか。

そして、私の頭にもう一つあるのが「清明愛」。「愛校心」と同じような「もっと大きなもの」のような・・・。

【校長のつぶやき】その8 「たかが“くつそろえ、されど“くつそろえ”」 （平成30年9月14日）

先日のフォレストパークでのこと。帰る際に、森の案内人の方が私にこんな話をされました。「子どもたちが森林館のトイレに行くときに、玄関にシューズを揃えて脱いでいましたよ。家や学校で指導をしていないとできないですね。」

最近めっきり涙腺の弱くなっている私は、この話を聞きながら込み上げてくるものがありました。

本校では、「昇降口の下駄箱の端にシューズのかかとを揃えること」を指導しています。全員がそこまで心を配ることができるようになると何かが変わる、と考えるからです。一段高みに上るようなイメージです。そんな姿を学校以外で見ることができたことが、とっとうれしかったのです。

たかが“くつそろえ”、されど“くつそろえ”。これからの子どもたちのさらなる成長が楽しみです。

【校長のつぶやき】その9 「マーキング」 （平成30年9月28日）

「動物が自分の縄張りを示す行動」を「マーキング」と言います。そういう意味では、私が毎朝している行動も「マーキング」と言えるかもしれません。

朝、学校に車を置くと、不審者に思われないように“黄色い交通安全の旗”を持って、その日の気分でコースを決めて出かけます。南町、郷野目から方木田へ行ったり、葉ノ木立経由でぐるっと大回りをしたり、清明町、矢剣町から方木田へ行ったり、鳥谷野から郷野目へ行ったり。1学期は学校の前の横断歩道で子どもたちが来るのをじっと待っていましたが、学区内を歩くと子どもたちの様子をより把握することができ、とても“有益な時間”となっています。

思わぬ“副産物”もありました。それは、1ヶ月が経って、体重が“ちょこっと”減ってきたことです。「不審者よ近寄るな」という念を込めながら、「マーキング」をして歩こうと思っています。

【校長のつぶやき】その10 「子どもの“キャラ設定”は変わるのか？」 （平成30年10月19日）

人は、誰もが、自分の人生の“主人公”として生きている。人生を一つの“ドラマ”に例えるならば、主人公（自分）の“キャラ設定”をして演じている、とも言える。

では、自由に“キャラ設定”ができるかと言うと、そうでもない。表面を繕ってみても、根本的なところは変わらない。というのも、私がそうだからである。だから「おまえのキャラ設定はダメだから変えろ」と人に言われても、「分かりました。今から変えます。」とはならない。

でも、そんな自分でも「キャラ設定を少し変えてみようかな」と思うときがある。それは“他人の生き方”に触れて、「そのキャラ設定いいな」「あんなふうになってみたいな」と思ったときである。

本校の子どもたちは「自己肯定感が低い」ことが課題の一つである。まずは「あなたのキャラ設定とってもいいね」という気持ちを伝え、その後に“わたし”を変えることから始めるのが大切なのかな。

【校長のつぶやき】その11 「いま、ここ」の気持ちを大切に」

(平成31年2月13日)

教職2年目に「教育相談」の世界に出あった。そのとき「自分が求めていたものは、これだ」と感じた。以来30数年、「教育相談」を柱に教員生活を送ってきた。教育相談の神髄は「いま、ここ」という考え方にあるのではないかと考えている。

先のことを考え憂えることを「不安」と言う。過去のことを考え憂えることを「鬱」と言う。どちらも行き過ぎると、「心の健康」を損ねてしまう。

また、「過去と他人は変えられない」と言う。ならば、過ぎた日を憂えず、他人が思い通りにならないことを憂えずに、「いま自分ができること」に尽力するのが「よい生き方」と言えるのではないだろうか。

一見すると「マイナスとを感じる出来事」も、後から振り返ると自分の成長にとって「プラスの出来事」であった、ということはよくあることである。天の配剤である。拙い自分は「いま、ここ」に生きるのみである。

【校長のつぶやき】その12 「昭和、平成、そして“令和”の時代へ」

(令和元年5月11日)

遠い記憶…。私が子どものころ、まだ日本は貧しかった。テレビは白黒からカラーへの過渡期だったし、スポンの膝が破れれば家で修繕するのは当たり前だった。高度成長期を経て、日本は目に見えて豊かになった。「がんばること」に価値のある時代だった。

時代は平成に入り、「コンピュータの進化」は凄まじかった。昭和の終わりに買ったワープロは2行分しか見ることのできない液晶画面であったが、ほしくて買った大画面のワープロさえ、あっという間に陳腐化した。時代の最先端として買った自慢の携帯電話も、あの重さは今では笑い話である。

そして、令和。「人工知能(AI)」の時代である。人間がロボットと共存する社会である。そんな時代を子どもたちは生きていく。もしかすると、より「人間らしさ」が求められる時代になるのかもしれない。そんなことに思いを馳せながら、子どもたちのために「今できること」に尽力する日々である。

【校長のつぶやき】その13 「スケーリング・クエスチョン」

(令和元年5月17日)

以前、「例外」と「成功の責任追及」について書いたことがあります。関連して、教育相談的な手法の一つに「スケーリング・クエスチョン」があります。それは、「0を最悪、10を最善(0から10までの尺度)としたときに、今の状況はどのあたり?」と聞くことです。

もしかすると、「2」という答えが返ってくるかもしれませんが。そのときに大切なことは、「-8」に目を向けるのではなく、「2」もあることに目を向けることです。「すごいね、2もあるんだ。何ができているのかな?」と「成功の責任追及」をしていくと、「できていない自分」から「できている自分」へと意識を変えることができます。

また、「1」あがった状態を考えることで、「何をしたらよいか」という次の一手が見えてきます。

私たち大人(親)も「できていること」「うまくいっていること」に目を向けると、落ち込まずに済むかもしれませんね。だって、この大変な世の中を生きただけで、価値のあることなのですから。

【校長のつぶやき】その14 「押すか、引くか・・・」

(令和元年5月24日)

子どもを動かすときに、大きく2つの方法がある。一つは、「プラスの面」からアプローチする方法。例えば、「これができると、こんなよいことが起きるよ」と伝えるやり方。もう一つは、「マイナスの面」からアプローチする方法。例えば、「これをやらないと、将来こまることになるよ」というやり方。皆さんの子育ては、どちらの色が濃だろうか。

要は、「バランス」なのではないのだろうか、と最近思う。「押したり」「引いたり」しながら、子どもの心にアプローチをしていく。その中で、その子にあった「ちょうどいい塩梅(あんばい)」を探る。おそらく意識をしてはいなくても、皆さんはそうしていることだろう。

ただ、根底には、その子を思う「愛情」が必須である。その思いさえあれば、押ししても引いても、子どもは分かってくれるものだと思っている。

【校長のつぶやき】その15 「“脳”を意識する」

(令和元年6月7日)

専門ではないので違ってもいいが……。空間には見えない電波が無数に飛び交っている。テレビの電波、ラジオの電波、無線の電波、そして「スマホ」の電波。それらの電波は、子どもたちの「脳」を刺激していく。

大人は何かか対応しているが、子どもの長時間のスマホ使用や、Wi-Fiを使用している長時間のゲームなどは、子どもの「脳」にとっては「影響が大きすぎる」と考えるのは、考えすぎであろうか。

子どもたちの「脳」は、今、急速に成長している。使えば使うほど「脳」は成長していく。ならば、学校教育の中で「考える」ことを大切にして、「よい刺激」をどんどん与えていきたい。そして、「脳」を鍛えるために「学びの習慣づくり」を推進していきたい。普段意識しない「脳」を意識することも大切だろうと、最近考えている。

【校長のつぶやき】 その16 「市内で一番の子どもたちに」

(令和元年6月21日)

本校の子どもたちは、「指導が入る」子どもたちである。ポイントを押さえた指導をすればするほど、期待に応じて変容してくれる。それだけ「素直」なのだと思う。でも、指導をやめるとその効果が減っていくのも事実である。

ならば、「子どもに根負けしない」で指導をし続けたらどうだろう。それは、いつしか「よい習慣」として根付くのではないだろうか。

本校は、全校児童が185名である。指導が浸透しやすい規模である。学校と家庭が手を取り合って子どもに「根負けしない」取り組みを続けていけば、すべてにわたって「市内で一番の子どもたちに育てる」のも可能であると考えている。

【校長のつぶやき(拡大版)】 その17 「学校と保護者が手を取り合って」(令和元年6月28日)

朝、郵便受けの新聞を取ろうとしたら、「LIVING」(6月28日発行 福島リビング新聞社)が入っていました。たまたま一面を見たら、「先生と保護者の関わり方」という表題が目がとまりました。取材を受けていた方は、添田和子先生でした。添田先生は、私の3代前の清明小学校の校長で、現在、福島県教職員相談室 教職員相談員をしておられます。私も、最近考えていたことがあったので、今回はその記事を取り上げてみようと思います。

〈添田先生が語っていたこと〉

「世の中の風潮として『Oか×』か、『100か0』かで判断する傾向があります。完璧な人間などいません。教師についても長所も短所も総合的に見て関わってほしいですね。」

「学校は、学習以外にも集団で生活することの大切さや人と関わることの素晴らしさなど、社会の中で生きていく上で大切なことを学ぶ場です。家庭は、わが子の良さを認め、大事に育てられていること、希望を持って生きていくことの大切さを教え素の自分を出せる安全基地です。教師は子どもにとって『働く大人』を家庭外で見る初めてのお手本。『人間っていいな』『人は信頼できるんだ』ということ伝えていく存在になれたらといつも願います。子どもたちは、それぞれの先生と触れ合うことで影響を受けます。さまざまな先生との出会いこそが将来、社会人として生活していく上で生きる力につながっていると信じています。」

「若くてエネルギッシュな先生も、キャリアがあってまじめな先生も、子どもにとっては大切なお手本。子どもは、教師の長所・短所、個性、性格を驚くほど感じ取る力があります。家庭で先生に対して不安を口にしたり、悪口を言ったりすると、子どもに良いことはありません。私自身の経験ですが、過去に、『若い先生の時には家で学習やしつけをしっかりする、ベテランの先生の時には家ではゆったり過ごさせる』ということを実践していた保護者がいて、なるほどと教えられました。双方向のよりよい関わりが、子どもの成長に大切です。」

最近、「教師のリーダーシップ」について考えていました。「価値観を子どもに提示するのが教師の仕事だ」と私は考えています。価値観を提示すれば、「そうだ」と思う子、「ちがう」と思う子もいるでしょう。でも、その過程で、個々の子どもたちの「価値観」がつかられていきます。一番いけないのは、価値観がぶれること。その度に異なる価値観で対応していたのでは、子どもの中に価値観がつかられませんし、子どもからの信用を失ってしまいます。

子どもが「教師への不平や不満」を家族へ話すときは、どうぞじっくりと「共感的に」聞いてあげてください。でも、お願いしたいことは、「同調」してその思いを“増幅させない”でいただきたい、ということです。

子どもが不平や不満を話すということは、親子の関係が“よい状態”にある、ということです。話を聞いてもらえれば、家でエネルギーを充電して、「学校でまたがんばろう」と思うことができます。

これからも、学校と家庭が協力して、子どもの中に「よい価値観」を根付かせていきたいと思います。

(添田先生の文章の引用については、福島リビング新聞社の許可を得ております。)

【校長のつぶやき】 その18 「“イチヨウの実”は、なぜ臭うのか」－校長の自由研究－

(令和元年10月25日)

校庭の南側に、「イチヨウの木」が3本ある。10月に入って毎日のように「実」が落ち、あの“独特の臭い”を発している。本校の通学路でもあるので子どもたちが踏んでは可哀想だと思い、なるべく登校前にきれいにしようと思うのだが、毎日毎日結構な量が落ちていて、既に車に踏まれてもいる。また、校庭の中は追いつかず、どうしようもない状態になっている。

掃除をしながら、「この世に起きる出来事がすべて必然である」ならば「イチヨウの実が臭いのも何か意味があつてのことだろう」と思った。そして、普通だったら「動物に食べてもらって糞として排泄されることで、種子を遠くに運び、種を存続させようとする」のに、「動物に嫌われる臭いを発するのはなぜか」と不思議に思った。そこで、安易ではあるが、ネットで調べてみた。

〈分かったこと〉

その1 「イチヨウの実」が臭いののは、「動物に食べられないようにするため」である。

私たち日本人は「銀杏（ぎんなん）」を食べるが、タンパク質や多くのビタミンを含む「大変栄養価の高い食材」である。栄養価が高いということは、「動物が好む食べ物」ということになる。でも、「イチヨウの木」の立場からすると、すべてを食べられてしまうと、種を残すことができない。そこで、「イチヨウの木」は、わざと「イチヨウの実」が「独特の臭い」を発するようにしている。

その2 「イチヨウ」には「雄株（オス）」と「雌株（メス）」があり、「イチヨウの実」がなるのは「雌株」である。

ということは、校庭南側の「イチヨウの木」は、一番西側の木が「雄株」で、東側の2本の木が「雌株」ということになる。街路樹として植える際は、最近は「雄株」を選んで植えることもあるそうである。

その3 「イチヨウの実」を踏んでしまったら、「重曹」を使うことで臭いを消すことができる。

これを実験で明らかにすれば自由研究として素晴らしいのだが、靴底についた「イチヨウの実」を水で洗い流し、「重曹」を溶かした水に数時間つけることで臭いは消えるそうである。

なお、ここまで「イチヨウの実」と呼んできた部分は、裸子植物のため「実」ではなく「種子」であり、臭いのする部分は「外種皮」、「銀杏（ギンナン）」として食べている部分は「胚乳」である。

今回調べてみて、「イチヨウの実」の臭いさえも、そのような臭いを発する「意味」がある、ということを確認することができた。

とは言っても、あの臭いには困ったものである。そんなときは「銀杏（ぎんなん）」の美味しさを思い出し、「人間にとって、よいこともあるさ」と、つぶやいてみようと思う。

【校長のつぶやき】 その19 「“イチヨウの実”は、なぜ臭うのか」－校長の自由研究 その2－

(令和元年11月16日)

「学校だより 第26号」で、「イチヨウの実（ギンナン）」の臭いについて調べたことを載せたところ、反響があり、次の情報を新たに得ることができた。（お子さんを通じて、新聞の記事をいただいた。感謝！）

〈出典〉朝日新聞 「サイエンス on Saturday (2019年11月9日)」

なんと、「イチヨウの実（ギンナン）」の臭いを好きな生き物がいた

→ それは、「恐竜」だったらしい。

いまのイチヨウの祖先と考えられる植物は、2億4500万年くらい前に現れた。それから種類を増やしながら、ジュラ紀や白亜紀といった時代にかけて、オーストラリアなど南半球も含む世界中に広まった。カナダで見つかった恐竜の糞の化石の中にギンナンがあった。ほかの哺乳類も食べていたが、恐竜がギンナンを食べて移動先で糞と一緒に種をまくことで、イチヨウが広まった可能性がある。

恐竜が絶滅したあとは、イチヨウもだんだんと衰退して、一時は絶滅寸前までいった。直接の原因は、寒くて乾燥した気候に変わったせいだが、ギンナンを食べる恐竜や動物がいなくなり、生える場所を広げられなくなったのも関係があるようだ。

中国にわずかに残っていたものを人間が増やして、日本にも千年くらい前に来た。いまでも、タヌキなどの一部の動物はギンナンを食べるらしい。

なお、イチヨウが恐竜に食べてほしくて、この臭いを出すようになったのかは、まだ証拠がなくてよく分かっていない。

・・・ということで、この先は、子どもたちの中から「学者」が出て明らかにしてくれることを期待している。

【校長のつぶやき】 その20 「同期のサクラ」

(令和元年11月29日)

実は、私は「ドラマ」を見るのが好きである。「ノーサイド・ゲーム」「陸王」「下町ロケット」など池井戸作品は欠かさず見る。また、「ハケン占い師アタル」「過保護のカホコ」など遊川和彦脚本のドラマにハマることが多い。そして、今、放映中の遊川氏脚本のドラマが「同期のサクラ」である。

主人公のサクラは、自分を曲げない。納得できなければ、社長にでも物を申す。その生き方で周りに影響を与えていく。別にサクラが周りに「変われ」と言っているわけではない。ただサクラの「生き方」に触れて周りが変わっていく。

先日の全校集会で子どもたちに「リーダーシップ力」という話をした。私は子どもたちに「自分の主人公として自分を律して、周りに影響を与える人」になってほしいと願っている。「人のせいにはしない」生き方をしてほしいと願っている。

さて、「同期のサクラ」である。前回、サクラは自分を曲げなかったが、ついに心が折れてしまった。これからサクラがどうなっていくのか、とても心配でもあり、とても楽しみでもある。

【校長のつぶやき】 その21 「保護者による“車での児童送迎”で危惧していること」

(令和元年12月6日)

私が、朝、校庭南側の道路を掃除しているのは、「通学路の安全を確保したい」という思いからである。「イチョウの実」や「イチョウの落ち葉」を避けて車道側に出ることをできるだけ避けたい、という思いからである。しかし、私の労力では追いつかない。結果、子どもたちは白線の外側を歩くことになる。

そして、その脇をわが子を送る車が通り過ぎていく。一番危惧するのは、「校地内に入る車の動線」と「子どもの歩く動線」が交差することである。動線が交差しないように子どもの動線を変更することも考えてみた。しかし、どう考えても子どもにとって「不利益になる動線」にしかならない。

校地の東側の道路は「午前7時半から8時半まで」は許可車しか通ることができないが、校地の西側から入る道路に規制はない。西側から来る車は何も違反はしていない。また、車で送ってくる事情があるのも分かる。教師も「交差する動線」で駐車場に車を入れているので「教師だけずるい」という話にもなってくるのだろう。

通学路を子どもにとって「不利益になる動線」に変更する前に、まずは、保護者の方の見識に訴える次第である。(簡単に言うと、事故を避けるために、車では学校に近づかず、少しでも遠くからわが子を歩かせてもらえないか、というお願い)

【校長のつぶやき】 その22 「ネット依存」

(令和元年12月13日)

正直、私も「ネット依存」の傾向がある。家では、暇さえあればタブレットを使ってインターネットに接続してしまう。また、最近は、本も電子書籍で購入し、液晶画面を見つめることも多い。

「読書に関する調査」を載せておいて何だが、じっくり静かな雰囲気の中で書物に向き合うことが少なくなった。皆さんはどうだろう。そして、子どもたちは…。

今、市教委の「調査研究部会」の一つを担当しているが、その調査結果から、本市でも「ネット依存」傾向のある子どもが一定数いることが分かってきた。「心身への影響」「睡眠との関係」を今後調べる考えである。

【校長のつぶやき】 その23 「『教育活動の充実』と『働き方改革』のバランスの中で」

(令和元年12月20日)

「働き方改革」が叫ばれ、学校も改善を迫られている。誤解をしていただきたくないのは、「教職員が楽をするため」のものではない、ということである。その目的を私なりに要約すると、「より授業の質を高める」「より子どもたちに向き合う」ために「業務の適正化への改革を行うこと」となる。「働き方改革」は「子どもたちの健やかな成長」につながっているのである。

学校は、保護者や地域の皆様の期待を受け、ここまで「何でも」引き受けてきた。学校への批判も「甘んじて」受けてきた。でも、どうだろう。もう「限界」である。「学校は、そして教職員は万能ではない」ことを強く発信すべきときにきているのではないだろうか。

今回、「文集『すかわ』」の作成にあたって「できない。もう無理だ。」と発信させていただいたところ、たくさんの支援の申し出があった。すぐ調子に乗る校長は、次年度に向けてどんどん「助けてー」と発信する考えである。本校は「ボランティア」ウェルカムである。教職員だけではなく、保護者、地域、外部講師など「みんなの力」で「子どもの笑顔」を実現していきたいと考えている。そして「保護者」「教職員」の「笑顔」も。

【校長のつぶやき】 その24 「おみくじ大吉」

(令和2年1月10日)

神社でおみくじを引いたら、何と「大吉」。これは「キテルネ!」と舞い上がっている。

「大吉」 光りかがやく 希望の扉が開く  
人生に晴れ舞台あり。 我慢のときは近く去り これまでの努力が 大いなる実りをもたらす。  
飛躍の力を蓄えながら 臆せず前に進め。

「仕事運」を見ると「積極的に進めてよし」。調子に乗った私は、迷いの中にあつた「次年度へ向けた構想」を思い切って進めようとしている。次年度は、新学習指導要領全面実施の年。そして創立百周年後の新たな一歩の年。すべては、本校にかかわる人(子ども、保護者、地域、教職員)の笑顔のために。新春にあたり、そんなことを考えている。

【校長のつぶやき】 その25 「体に良い“生活リズム”とは」

(令和2年1月17日)

今の時代は、電気が自由に使え、夜も明るい中で生活することができる。寝る時刻は「自分の意思」で決められる。でも、長らく「人間」は、日の出とともに起き、日の入り後は「わずかな明かり」の中で過ごしてきた。夜に灯すための木材や油も「有限」であった。私たちの「体」の根本には、今もそのような「リズム」が刻み込まれているのではないだろうか。家庭生活に入り込んで恐縮だが、子どもにはそんな「リズム」で生活させたい。

【校長のつぶやき】 その26-1 「次年度へ向けた構想 その1」

(令和2年1月24日)

3学期は、次年度へ向けた計画を作成する時期です。本校でも、次年度の「教育課程・教育計画」を作成する作業を進めています。大きな改善点については、公式には、2月6日に開催される「PTA理事会」での説明、3月4日に開催される「PTA総会」での説明を経て進める考えです。

ここでは、「校長のつぶやき」として、非公式に「次年度へ向けた構想」について触れていこうと思います。

〈変更点〉 その1 「教育目標を変える」

「みんなとともに 笑顔いっぱい」という大きな目標は変わりません。その下位目標の「目指す子ども像」を変更します。

令和元年度 ○ かしこい子 (知) ○ やさしい子 (徳) ○ たくましい子 (体)	→	令和2年度 ○ 学び合う子ども「まなびあい」(「知識・技能」の習得) ○ 認め合う子ども「みとめあい」(「思考力・表現力・判断力」の育成) ○ 高め合う子ども「たかめあい」(「学びに向かう力、人間性等」の涵養)
---	---	--

これは、次年度から全面实施される「新学習指導要領」の考えに合わせるために変更するものです。「知」「徳」「体」のそれぞれで「資質・能力」を育むように指導をしていきます。

〈変更点〉 その2 「登校時刻を8時に変える」

現在の「日課表(午前5校時)」を継続する考えです。さらに“完成型”に近づけるため、登校時刻を10分早め、その10分を効果が上がるように位置付けます。

令和元年度 【朝の活動】 10分間 【給食開始】 12時35分 【昼休み】 30分間	→	令和2年度 【朝の活動】 15分間 読書活動などが可能になります 【給食開始】 12時30分 早くなります(昨年度より15分遅れ) 【昼休み】 35分間 長くなります(昨年度より10分短い)
---	---	--

福島第一中学校の登校時刻は「7時50分」、岳陽中学校の登校時刻は「8時」です。本校でも「7時50分」までの登校を推奨します。そして、着替えを済ませ余裕を持って「8時」の「朝の活動」開始を迎えることができるよう次年度は指導をしていきます。



【校長のつぶやき】 その26-2 「次年度へ向けた構想 その2」 (令和2年1月31日)

〈変更点〉 その3 「学級編制のあり方を『少人数指導を基本』に変える」

本県では、「少人数学級」か「少人数指導」を選べる「児童数」があります。現在は「少人数学級を基本」としていましたが、今年度進めてきた「学年は一つ」の考えをさらに進め、次年度は「少人数指導を基本」とする考えです。

「少人数学級」…2学級にしてそれぞれに教員を配置する。

「少人数指導」…1学級にして教員を2人配置する。

【令和2年度(推定される児童数を基にした学級数)】

【1年】1学級(少人数指導)

【2年】1学級(少人数指導)

【3年】1学級

【4年】1学級

【5年】1学級(少人数指導)

【6年】2学級

【わかば学級】1学級

※ただし、県・市の基準があるため、児童数の増減で変更になる場合があります。

次年度の6年生は、「基準」から2学級のままになります。従来通りに進級時の学級編制替えは行わず、現在の学級を継続します。2学級ではありますが「学年は1つ」を実現していきます。

【なぜ「少人数指導」を選ぶのか】

例えば、「3」の力を持つ教師が2人いたとしましょう。「少人数学級」では、1組も2組も教師の及ぶ力は「3」のままになります。

反面、「少人数指導」では、「教師のよさ」をうまく生かすことができれば、「 $3+3=6$ 」「 $3\times 3=9$ 」とその効果は「倍以上」になる可能性があります。

もちろん「1学級の人数が増える」ことによるデメリットはあります。そのことを分かった上で、「少人数指導」のメリットに着目して、「効果的な指導のあり方」を工夫していきたいと考えています。

「子どもの数」からすると、もう既に、本校は「学年単学級」規模の学校です。そこを「出発点」として、学校経営を進めていこうと考えています。

【校長のつぶやき】 その27 「個別最適化された学び」

(令和2年2月14日)

「子ども一人に1台のパソコンやタブレットが整備される」というニュースがあった。国の「GIGAスクール構想」によるもので、その目的は「個別最適化された学び」を実現することである。

「個別最適化」という言葉をよく聞くようになった。個々のタブレット端末から収集される教育データは「AI(人工知能)」で分析され、個々の指導にフィードバックされる。もしかすると、一人一人の学習する内容もその子に合わせたものになるのかもしれない。学校教育の転換点が「今」だったと後から振り返ったときに思うのだろう、という予感がする。

本校の教育目標は「みんなとともに」である。そのような時代が来たとしても、「学び合う姿」「認め合う姿」「高め合う姿」は大切にしていきたいものだと考えている。

【校長のつぶやき】 その28 「普通とは」

(令和2年2月21日)

録画していたNHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」の「あなたらしく笑顔で生きて～精神科医・本田秀夫」を見た。本田医師は「発達障がい」を専門とする医師だ。その医師は自分に問いかける。「普通とはなんだろう。」…同じような「問い」が私の中にもある。「発達障がい」の子どもは何か「特別な存在」なのだろうか。多数を「普通」というならば、天才も「発達障がい」なのではないだろうか。「普通」という考えが「発達障がい」という概念を生んでいるのではないのか。もしかすると「発達障がい」に対応できない「学校のシステム」の方に問題があるのではないだろうか。凸凹を「個性」ととらえる社会が健全ではないかと最近考えている。

【校長のつぶやき】 その29 「もう戻れない」

(令和2年4月17日)

今回の「臨時休校」は、現在の「学校教育の課題」を浮き彫りにした。

一番感じるのは、「ICT（情報通信技術）環境の遅れ」である。本校では、家庭との連絡体制を「メール」で構築しているが、子どもたちと直接やり取りする手段がない。福島市では、今年度からの3年間で、一人一台の「タブレット端末（ipad）」が整備されるが、この動きをより加速させる必要がある。

そして、強く感じるのは、「子どもの“学びへの主体性の違い”が、より大きな“学力差”となって現れるおそれ」である。教師は「プロ」である。プロである教師は「指導技術」を持っている。しかし、家庭にいる子どもには、それは届かない。お子さんは、「自分で自分を律して学ぶこと」ができていたのだろうか。

学校が再開した後は「自分をみがき、成長し続ける子ども」の育成に向け、愚直に実践を積み重ねる考えである。その指導が効果を得たとき「子どもが変わった」と保護者の方にも実感してもらえることだろう。今、教育は、「新たなステージ」に入った。もう元には戻れない。「その先へ」進むのみである。

【校長のつぶやき】 その30 「子どもの学びをすすめるために」

(令和2年4月30日)

「子どもたちの学びを止めない」を合い言葉に、国・県・市から様々な「学びの環境」の提供が保護者の方になされている。しかし、この情報は各家庭で効果的に活用されているのだろうか。私は、「課題が2つある」と感じている。

【様々な「学びの環境の提供」に関する課題】

- ① インターネットを使う「学びの環境の提供」がほとんどだが、すべての家庭にインターネットの環境が整っているわけではない。（本校の調査では「整っている」家庭は40%）
- ② 使えるコンテンツはたくさん提供されているのだが、「何をどのように使うか」の学び方が提供されていない。（情報過多で目移りしてしまい、継続的な利用に結び付かない）

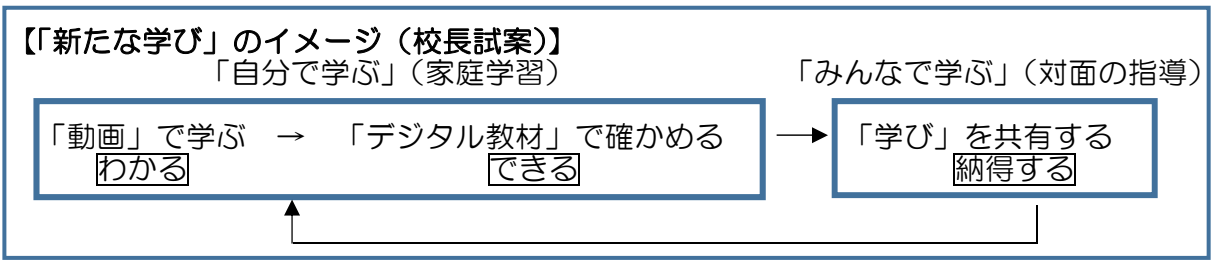
では、この課題を踏まえての提案を…

◇ ①について

「Wi-Fi 環境の整備」は家庭にお願いするしかない。この環境があれば、学校に配備された「タブレット端末」を貸し出すこともできる。なお、整備のための金銭的な支援については、校長会等を通して要望していきたいと考えている。（光回線の工事費、月々のプロバイダ使用料等が必要。これからは5Gの時代だが、恥ずかしながら勉強不足でその説明はできない。）

◇ ②について

「新たな学び」を提示し、その学びに「使えるコンテンツ」を提案する。



〈「動画」で学ぶ〉 まずは、「動画」を授業代わりにして学ぶ。分かるまで繰り返し見る。

- ① 「NHK for school」
  - ・ テレビ（Eテレ）でもネットでも視聴できる。
- ② 「Edumall（エデュモール）」
  - ・ 市教委の「元気あふれるふくしまの子ども学びの広場」のコンテンツの一つ。
  - 「web 学習教材 要点まとめてチェック!」「理科 ショートコンテンツシリーズ」で学ぶ。

〈「デジタル教材」で確かめる〉 チェック問題を解いて確かめる。

- ① 「web 学習教材 要点まとめてチェック!」の「カード」問題（Edumall（エデュモール）内）
  - ② 「小学算数 3ステップ デジタルドリル」（Edumall（エデュモール）内）
- ※ 小4～6年生は、県教委作成「定着確認シート」「活用力育成シート」も解いてみる。

〈「学び」を共有する〉 授業では「学び合い」「認め合い」「高め合い」のよさを生かす。

なお、3月の臨時休校の際に本校独自に契約した「まなびポケット」は、5月末で「無償期間」が終了する。その中で「eboard ホームスクール」だけは「無償」で継続して使うことができる。

前号で「子どもの学びをすすめるために」と題し、「新たな学びのイメージ」を提案してみた。最近、「オンライン授業」とか「オンライン学習」という言葉を聞くが、今まで親しんでこなかったの  
でちょっと混乱している。そこで、整理をしてみることにした。

## ◇「オンライン授業」には2種類ある。

- ① オンライン授業（録画） 録画した映像をインターネットで一方向で配信  
塾や予備校の授業などでよく活用されている手法。自分のペースで好きな時間に学習できる。
- ② オンライン授業（LIVE 配信） ネット回線や衛星回線を使ってのLIVE 配信  
高性能 web 会議システム・テレビ会議システムなどを活用した生放送の授業。  
動画でお互いの顔を確認でき、質疑応答や画面共有機能で効率よく学習できる。

## ◇2種類の「オンライン授業」に本校はどう取り組むか。

## ○「オンライン授業（録画）」への取り組み — 「eboard ホームスクール」—

すべての授業の録画を本校だけで準備をすることは現実的ではない。そこで「既にあるもの」を活用することが必要になる。

前号では、「動画で学ぶ」として、「NHK for school」「Edumall」を紹介したが、その後もっとよいものを見つけた。それは、「eboard ホームスクール」の活用である。

## ◇「eboard ホームスクール」

本校独自契約の「まなびポケット」にログインすると、「eboard ホームスクール」というコンテンツがある。この臨時休業期間に合わせ「時間講習式」に変わった。「教科」と「単元名」から選んでクリックすると、「NHK for school」や「動画」を見ることが  
できる。

前回紹介した「Edumall」は市が推奨しているものだが、公開は5月末までになるという記載があった。それに対し、「まなびポケット」は有償のコンテンツは5月末で終了だが、「eboard ホームスクール」だけは今後も無償での利用が可能である。

## ○「オンライン授業（LIVE 配信）」への取り組み — 「Microsoft teams」—

こちらでよく使われるアプリに「Zoom」がある。大学や塾の「オンライン授業」で使われることが多い。各自所持のメールアドレスで利用できる利便性がその理由の一つだと思う。しかし、セキュリティの問題も聞こえてくる。

そこで、今回、テレビ会議システムを内包する「Microsoft teams」に本校を登録してみた。教育機関は「無償」で使用することができる。まずは、教職員同士で試してみて、うまくいったら、家庭にネット環境の整っている高学年の子どもたちと「オンラインミニ集会」でもしてみよう  
と考えている。

文部科学省は、学校で行う「授業」のことを「対面指導」と表現している。それは「対面指導」以外の教育の存在を認めているようにも感じる。「オンライン授業」もその一つであり、益々存在感が増すのかもしれない。

緊急事態宣言期間中、土日は「STAY HOME」をしていた。我が家の庭（実は市の公園用地扱いの土地）には手入れを親任せにしている「松」があるのだが、真似事でもしてみようかと思い、初めて剪定作業に挑戦してみた。

作業は「みどり摘み」というもので、「松の新芽」を取る春の作業である。園芸用の三脚脚立に上がって上の方から順に作業を進める。自分に近いところの作業は楽だが、遠いところは手がなかなか届かない。そして、次第に慣れてきて「後もう少し」と手を伸ばした瞬間、脚立はバランスを失い足から離れていった。枝にぶら下がり「九死に一生（大げさか）」を得たが、人には見せられない情けない姿であった。

今まで「松」など全く関心なかったのだが、この体験後から「松」が気になってしかたがない。人の家の庭にある松を見ては、全体の形や枝ぶりを見て感心している。

でも、「手入れ」は大事である。一朝一夕にはあの形はできない。将来を見据えた「剪定」作業と、春の「みどり摘み」初冬の「揉み上げ」など毎年の細やかな作業の積み重ねの結果であろう。「ん、これは“子どもの教育”にも言っているかも…」とも思ったが、「松」の話である。ご自宅に“自慢の松”があったら、ぜひ教えてほしいものである。

【校長のつぶやき】 その33 「ちょっといい話」

(令和2年7月3日)

前から気になってはいたのだが…。そのお父さんは、わが子と一緒に玄関まで歩いてきていた。だから近隣にお住まいなのだろうと思っていた。

ところが、偶然、西側の有料駐車場に車を入れるのを目撃した。それも何度も。そこで、はっと思い、お住まいの住所を見たら、学区外だった。そのお父さんは毎朝子どもを送ってきて、駐車場に車を入れてからお子さんと一緒に学校まで歩いてきていたのだ。

すれ違ったときに、そのことを話題にしてみた。すると、「自分は清明小出身なので、わが子も清明小に通わせたいと思った。有料駐車場にかかるお金は気にならない。」と話された。毎日続けているのがエライなあと思うとともに、何か心がほっこりした。「ちょっと」ではなく「とてもいい話」である。

【校長のつぶやき】 その34 「運動着問答」

(令和2年7月10日)

毎年、今ごろの季節になると、担任から次のような話が出される。「運動着が汗臭くなるので、週の半ばに持ち帰らせた。乾かないときは、白のTシャツの着用を認めてもらいたい」と。これに対する私の答えは「運動着以外の着用は否」である。その理由をちゃんと説明したことはない。おそらく「わからず屋の校長」と職員は思っていることであろう。(納得できる説明をする自信が私にはない…)

その理由は、「運動着の購入システムは業者によって支えられている」ことに由来する。本校の運動着取扱業者は、三河台小学校区の「やぶうち商店」である。やぶうち商店では、運動会などの行事の時期や毎年の販売状況から予測をし、在庫を抱えながら本校保護者の来店に備えている。在庫が少なくなると、運動着を製作している「クラロン」に発注する。値上げをせずがんばってくれていたが、工場からの仕入れ値が上がり、値上げせざるを得なくなった。そのときでも、本校に来て、事前に説明をしてくれている。

もし、私が、(たった一日のことではあるが)「運動着以外も可」と答えたとしよう。それは、いずれ関係業者の耳にも入るであろう。私には、それは「信頼関係の崩壊」の始まりであり、ひいては「運動着の購入システムの崩壊」の始まりにつながるのではないかと危惧してしまう。

ある人はそれを「業者との癒着」というかもしれない。でも、考えてみてほしい。本校の運動着は本校の保護者にしか売ることができない。本校が教育活動中の運動着着用を推奨している限り、この購入システムは維持していかなければならない。

「たかが運動着、されど運動着」である。私が本校にいる間、職員からまた同様の意見があっても、私の答えは決まっている。「否」である。ただし、「汗臭い運動着を家に持ち帰って洗ってくること」は“大賛成”である。週の半ばと言わず、毎日洗濯してもらえると、子どもたちも気持ちがよいであろう。

そのためには、運動着が2枚必要である。経済的なことで申し訳ないのだが、まだ複数枚用意していないご家庭は、子どものために何とか工面していただけないだろうか。これが“校長の本音”である。ただし、神に誓って、業者からは一銭ももらっていないことを申し添えておきたい。

【校長のつぶやき】 その35 「臨機応変」

(令和2年7月17日)

昇降口の中での「密」を避けるため、子どもたちは外に列をつくる。その後は、順に消毒をしてからシューズを脱ぐ。学校再開後は、誘導するための「赤い三角コーン」を並べていた。慣れてくると、コーンの数を減らし、今はない。子どもたちはそのときの列の状況を見て、自分で“臨機応変”に並んでいる。

この“臨機応変”が難しい。列に並ぶには、“軒下の長短する列”にうまく入る必要がある。並んでいる人がいなければ真っ直ぐ昇降口に、列が短ければ花壇の切れ目から、列が長くなれば大回りして列の後ろからと。“臨機応変”に対応できる「要領のよい子」をつい称賛してしまう。

さて、仮にA君と呼ぶが、彼は“臨機応変”に対応することが難しいようだ。先日も列が短いのに、大回りをして列の後ろに並んでいた。おそらく彼の頭の中は別なことで一杯なのではないかとも思う。先日も、「家にあるミニトマトに実がなりすぎて茎が折れそうだ。どうしたらよいか。」と校長に話していた。これまでも、たくさんの「なぜ」を彼の口から聞いている。

周りに目配り気配りを上手にする“臨機応変”な生き方もよいか、“臨機応変”とは無縁な生き方もよいのではないかと思う。そして、そういう子を許容する学校の雰囲気でありたい。A君を“そのまま”大事に育てることが、A君が「博士」となり世界で活躍することにつながるのではないかと考えている。

**【校長のつぶやき】 その36 「どうせ自分なんて」****(令和2年7月22日)**

「どうせ ぼくなんて」「どうせ わたしなんて」という言葉が、子どもの口から聞かれたら、それは「黄色信号」である。「自己肯定感」が著しく低下していて、「自分という存在」を受容できない状態になっている。言い換えると、「心のエネルギー」が「枯渇」気味になっている。

こんなときに、私たちは、「そんなことはないよ」と否定してみたり、「こんないいところがあるよ」と持ち上げてみたりするのだが、「そんなウソばかり言って」などと言われるのがオチである。「閉ざした心」には「言葉」はうまく届かない。

では、こんな方法はどうかだろう。それは「子どもが生まれたときの写真を一緒に見る」という方法だ。親は誰もが子どもが産まれた瞬間は「喜び」に満ちていたはずである。その「喜び」を、素直な気持ちで伝える。ただ、それだけである。その「幸せな空間」は、子どもの「心のエネルギー」を満たしていくはずである。

「愛」は“条件付き”であってはならない。“無条件”の「愛」に包まれている子どもは、「心のエネルギー」が満ち、“ポジティブ”である。「子どもが生まれたときの写真」は、親にも「無条件の愛」に満ちていた、あの“幸せな瞬間”を思い起こさせてくれるかもしれない。

**【校長のつぶやき】 その37 「リーダーシップ」****(令和2年7月22日)**

先週の全校集会（放送）で「リーダーシップ」の話をした。本校不変の教育目標は「みんなとともに笑顔いっぱい」だが、新たに「自分をみかき、成長し続ける子どもの育成」を掲げている。このことを「“リーダーシップ”のある子になるのだよ」と説明した。

こんな話で恐縮だが、子どもの目の前には無数の「パラレルな未来」が存在している、としよう。様々な“外的な要因”の影響は受けるが、どの未来を選ぶかは「本人の選択」である。そして、選ばなかった未来には残念ながら進むことはできない。いくら“外的な要因”のせいにとしようと、「選んだ未来」である「いま・ここ」しかない。ならば、“外的な要因”すら受けとめて、「いま・ここ」で「リーダーシップ」を発揮して、「主体的に自分の未来を選択できる子ども」に育てたい。

全校集会の次の日の朝、あいさつをする子どもたちの声に“変化の兆し”を感じた。活動日ではないが、朝の掃除に励む子どもの姿も見られた。誰も「校長の話」をほめてはくれないので、「子どもの心に届いたのかもしれない」と勝手に都合のよい方に解釈して、“自画自賛”をしている。

**【校長のつぶやき】 その38 「ハチにご注意！」****(令和2年7月31日)**

“一瞬”だった。草刈り機を右から左に動かした刹那、右手の甲に、ものすごい痛みを感じた。いや、痛みではない。「熱さ」である。瞬間的な「熱さ」である。草刈り機の刃か、枝などの破片がとんできてあたったのかと始めは思った。でも、その場の状況から、もしかしたらハチではないかと思い直し、毒を吸い出した。そして、市販の薬をつけてみた。

最初は、うそのように何の変化もない。ただ、刺されたところが、ヒリヒリするぐらいである。数時間後には、手の甲の半分が腫れてきた。次第に腫れは広がり、次の日には全体に広がった。そして、手の甲はパンパンに腫れ上がった。まさに、“グローブのように”である。

病院に行かなくても治るとは思ったが、念のため行ってみた。「同じ症状の方が今日3人目です」という無碍もない医者言葉と、塗り薬、飲み薬をもらって帰ってきた。

さて、後から調べた「ハチに刺されたときの対処法」で大切な点は、ハチの毒は水に溶けやすいので、まずは「流水で冷やしながら洗う」ということである。ちなみに、毒を口で吸い出すことはしない方がよいようである。また、刺されて1時間以内に「アナフィラキシー症状（急性のアレルギー反応）」が出現したときが危ないので、その際は至急の医療機関の受診が必要である。なお、この「アナフィラキシー症状」は一度刺されてからが危ないらしい。ということで、私の命は、“ハチ”にも委ねられることになった。

**【校長のつぶやき】 その39 「子どもは成長している」****(令和2年8月7日)**

「いまここ学習室」は、本校の「日課表（午前5校時）」のよさを生かすために考えた「自学自習の場」である。帰りの会を終えた放課後、希望する子どもたちが、宿題や自主学習を行っている。今年度はこの状況で実現してはいないのだが、「学生ボランティア」とのふれ合いも“売り”の一つである。

さて、仮にB君としよう。3年生の彼は、今も「いまここ学習室」によく来ているのだが、2年生のときは集中するのに時間がかかる子だった。一旦椅子には座るのだが、いろいろなところに関心が向いて、いつの間にかいなくなってしまう。また、机に向かってはいても一向に取りかかる気配がない。時間が終わる頃になってやっとエンジンのかかる子だった。

通常は職員室前の廊下が「いまここ学習室」の場なのだが、午後の日差しが強いのと、梅雨明け後の暑さに対応するため、今週はエアコンの効く校長室を開放している。B君も来ていたのだが、彼はとても変わった。まず、すぐにノートを開いて学習を始められるようになっていた。しかも、話をしていた友だちに「静かにして」などと注意をしている。ひょうきんな彼の個性はそのままなのだが、生きる姿勢が少しずつ変わってきたのかなと思う。「子どもは成長している」そんな当たり前のことを再確認した出来事であった。

【校長のつぶやき】 その40 「“北風”と“太陽”と」

(令和2年8月24日)

ドラマ「半沢直樹」を楽しみに見ている。前にも書いたが、池井戸作品は“私の心”をくすぐるのだ。視聴率もいらいしい。なのに、今回は、“100%はのめり込めない自分”がいる。

それは、「“恫喝”のように力で相手をねじ伏せる場面」に起因している。これは、正義を貫き悪を懲らしめる“水戸黄門の印籠”的な場面で、このドラマの“肝”である。いわゆる「倍返し」である。でも、この場面がしっくりこないのだ。なぜだろう。教育現場でもこのような指導をすることがある。「北風」のような指導である。

一方で、「太陽」のような指導もある。“心に寄り添う指導”とも言える。刑事ドラマでカツ丼を食べながら「おまえの気持ちは分かるよ。でも、やったことはいけないよな。」「はい、申し訳ありませんでした。二度といたしません。(涙がポロッ)」というような場面である。また、悪いところには片目をつぶって、少しでもよいところを認めることで「よりよき成長」を促す指導もある。

ご存じだろうか、2020年4月に「改正児童虐待防止法」が施行され、「親の体罰」が禁止された。しつけの手段として「体罰を行使してはいけない」ということである。世の流れは、「北風」のような指導から「太陽」のような指導へと移っている。

半沢直樹にやり込められた“わるもの”たちは、新しい居場所で改心して生きているであろうか。恨みや辛みを心に抱えたまま斜に構えて生きてはいないだろうか。なぜか、「倍返し」よりも、「施されたら施し返す。恩返しです。」という大和田常務の言葉の方がしっくりくる今日この頃である。

【校長のつぶやき】 その41 「PTAのトリセツ」

(令和2年9月3日)

県教育委員会の鈴木淳一教育長と近しく話をさせていただいたときに、「『PTAのトリセツ』という本を読んだことはあるかな」と聞かれた。正直に「ありません」と答えると、後日その本が手元に届いた。わざわざ購入してくださったのだ。ありがたく読ませていただくことにした。

ある中学校のPTAの話である。「懇談会での役員決めでのくじ引き」や「専門委員長決めでのじゃんけん」など「PTAあるある」満載の学校を、保護者と校長がともに奮闘して、“よりよいPTA活動のあり方”を模索した記録となっている。

その中に「運営委員会」の活動がある。毎月1回定期的に開催し、「役員なら誰でも参加できる会」となっている。校長は必ず参加し、保護者の声を学校経営に反映させていく。「筋書きのない意見交換の場」は好評で、ほとんどの役員が参加するようになったとのことである。このほかにも、「役員全員立候補制」「専門委員会の廃止」など興味深い内容が書かれている。

「まえがき」には、「ゴールを『入学式と同じくらいの親子の笑顔』に設定したら、こんなんできました!という、PTA改革の記録です。」とある。よかったら、ご一読を。

【校長のつぶやき】 その42 「校長の見ている景色」

(令和2年9月11日)

私は、ワンマンである(らしい)。「トップダウン」とか「校長が決めている」とか「保護者の意見を聞いて決めるべきだ」とか、耳に入ってくる言葉や、学校評価アンケートの意見などを踏まえると、そういうことのようなのだ。

私は、校長の仕事は「決めること」だと考えている。「やる」のか「やらない」のか、2案あったら「どちらにするのか」。それは、「どちらが正しいか」ではなく、校長として「どちらを選ぶか」である。

例えば、本校の日課表では休み時間が5分であるが、「5分では足りない。10分がよい。」という意見がある。私も「その通り」だと思う。その考えは「正しい」のである。ただ「校長が見ている景色」に照らして5分を「選んでいる」に過ぎない。

この「学校だより」は「校長の見ている景色」を伝えるための“大切なツール”である。なぜそれを「選ぶ」のか「選んでいる」のかを理解していただきたいと考えている。しかし、10人いれば、10人が違う“景色”を見ている。その“景色”は全く同じにはならない。

私は、ワンマンである。でも、“聞く耳”は持っているつもりである。それぞれの見ている“景色”の話を聞かせていただきたいと思う。でも、最後は「校長の見ている景色(自分が描く理想とする本校の姿)」に照らして決めさせていただく。それが「校長の仕事」だからである。だから、私はワンマンなのである。

【校長のつぶやき】 その43 「分身の術が使えたら・・・」

(令和2年9月18日)

2学期が始まってから先週まで、登校時は昇降口前にいて、「検温」に携わっていた。職員の協力を得て検温作業も軌道に乗ったので、今週は“外回り”をしている。

学区内を歩くと、様々な気づきがある。「川の水がいつもより多いな」とか「新しい家が建ったな」とか違いに気づくこともあるし、「Aさんは、お家の人と来ているんだな」とか「あの方は、Bさんのお家の方なんだな」とか校長室には分からない気づきもある。思いがけず卒業した中学生と出会い、一言二言交わす会話も楽しいものである。暑さも和らぎ、30～40分のウォーキングは私にとってちょうどいい。

でも、昇降口にいると“全員”の子どもたちに会えるのだが、“外回り”に行くと、すれ違う“一部”の子どもにしか出会えない。「Cさんは、泣かずに来たかな」「昨日遅刻したDさんは、今日はもう着いたかな」あれこれ考えながら学校に着くと、げた箱にシューズがあるかを確認する。

昇降口にもいたいし、学区内を歩きながら登校の様子も見てみたいし、体が一つしかないのが悩ましい。分身の術が使えたら・・・と思うこの頃である。

【校長のつぶやき】 その44 「“ケの日”の風景」

(令和2年9月25日)

本校webページの「ブログ」に自分で記事をアップしているのに、家にいるときに何度も見返している自分がいる。最近ふと思ったのだが、今年度は「授業風景」の記事が多いようだ。

毎日とはいかないが、2校時か3校時に校舎内を一周するようにしている。そのときに、各教室の様子も見させてもらっている。授業者の指導の工夫に気づいたり、子どもの学びの様子に心を動かされたりしたときが、“シャッターチャンス”である。撮った写真の中からその日の記事になるものを選んで、夜に発信している。

前に「ハレの日（特別な行事のある日）」と「ケの日（日常）」について書いたが、以前は「ハレの日」の記事にすることが多かった。「ハレの日」は、目を引きやすく、記憶にも残るものである。しかし、子どもの力を真に高めるのは、記憶にも残らない“日常の積み重ね”である「ケの日」である。

もちろん、「ハレの日」も「ケの日」も大切ではあるが、本校において「ケの日」でも記事にできるほど日々の教育活動が充実していることは、うれしい限りである。

【校長のつぶやき】 その45 「『エール』のある場面」

(令和2年10月9日)

今回の朝ドラは、福島市出身の古関裕而がモデル（役名は古山裕一）である。福島ゆかりのドラマということで、その日の放送を録画しておき、家でリラックスしながら見ている。

さて、少し前になるが、裕一の妻である“音”が、音楽教室を開く場面があった。そこに、ある男の子が参加するのだが、彼は歌うときに、正しい音程を取ることができない。一緒に歌っている子たちから非難され、やめようかと悩む。そのとき、裕一は彼に“ハーモニカ”を教える。音楽教室にハーモニカの演奏で参加するようになった彼は、ほかの子からも称賛されるようになる。居場所を見つけた彼は、その後も楽しく音楽教室に通うのであった。

「みんなと同じ」は、時に人を苦しめる。人は「凸凹」があって、当たり前。「凹」に目を向けるよりも「凸」に目を向けた方が、うまくいくことも多い。「凸凹」は「個性」である、という考え方が学校に浸透したときに、真に「みんなが笑顔」を実現できるのではないかと「エール」を見ながら考えた。

（と、カッコいいことを書いているが、きょうも子どもの「凹」を見付けては「こらっ」と指導している私である。）

【校長のつぶやき】 その46 「校長がお似合い!？」

(令和2年10月16日)

その男の子は、自主学習もがんばる子だった。臨時休校中に推奨した「NHK for school」の理科の映像を見てはその感想を書いたり、自分で購入した算数科のプリントにも取り組んだりしていた。あるとき、廊下ですれ違った際に、「将来の夢ってあるの?」と聞いてみた。その子は躊躇なく「医者です」と答えた。

それを聞いた私は、「君なら絶対になれるよ」と心の中でつぶやいた。今度は「なぜ医者になりたいのか」を聞いてみたいと思う。

また、別な日に、昇降口前で並んでいたある女の子に「将来何になりたいの?」と聞いた。その子の答えは、「穂波先生のような優しい保健の先生になりたいです」であった。ちなみに穂波先生とは、本校の養護教諭である。続けて、「お姉ちゃんは看護師志望だが、私は注射を打つのがいやなので、保健の先生になりたいです」とのことであった。

「自分の夢」を即座に答える子どもに接し、私は自分が恥ずかしくなった。行き当たりばったりで生きてきたし、小学校の教師になろうと思ったのも、受験を控えた高校3年のときだった。そんなことを話していたら、突然その女の子が言った。「校長先生は、校長先生がお似合いだと思います」たぶんフォローしてくれたのだろう。うれしい気持ちとともに、なぜか余計に恥ずかしくなった自分もいた。

